

白川静のことば

《13》

鰥
魚
妻



金子都美絵・画

『礼記』の王制や文王世子篇にみえる老人たちは、三老・五更・群老として一代の尊敬を受け、公的な儀礼には特別の席次が与えられた。しかしそれは、遠い昔のことである。杜甫のような詩人も、衰残の果てに、「老病 孤舟あり」の句を残して、まもなく孤独の生涯を終えた。よき家族制度の時代にあっても、老人はしばしば孤独を免れえなかった。年若い孤独であることは、悲惨であった。妻を失った老夫を鰥かんといい、夫を失った老婦を寡かという。西周後期の金文である毛公鼎毛公鼎に、すでに鰥寡の語があり、『詩経』にもその語がみえているから、古くから社会問題としてとりあげられていたものであろう。鰥は魚と衆みみだとに従う字である。衆は涕ていの初文であるから、字は会意であるうが、「魚の目に涙」では、やもめの意味は出てこない。ただ魚が、結婚の祝頌歌に多くみえて女性の象徴とされているらしいことからいえば、あるいはそこに意味があるのかもしれない。「魚と女」というテーマは、中国古代の民俗の中でも、興味ある課題をなすのである。